日本語のスピーチレベルシフトの生起条件と機能
―― 鉄骨工場で働く技能実習生に向けられた日本人同僚の発話の分析から ――

Conditions and functions of Japanese speech-level shift
―― From the analysis of Japanese colleagues' utterances toward technical trainees working at steel factory ――

張　　学　盼*

ZHANG Xuepan

（要旨）

日本語のスピーチレベルシフトについての研究は盛んに行われてきたといえるが、それらに用いられたデータは友人か初対面かのような親･疎関係の会話や教室における教師と学生の会話、あるいは、前もってセリフが書かれた脚本のものなど、特定の条件を設定した会話からのものが多い。また、接触場面の場合には、取り上げられた対象は留学生に止まり、技能実習生に関するものは管見の及ぶ限り見当たらない。そこで、本稿は技能実習生を対象とし、実習実施機関で生じた自然会話に注目した。具体的には、指示が多く、かつ危険性を伴う鉄骨工場をフィールドとし、技能実習生に向けられた日本人同僚の発話に注目した。

その結果、1）朝礼、会議、送別会は丁寧体を基調としているのに対し、作業現場の発話場面は普通体を基調としている。2）先行研究ではまだ言及されていないが、本研究では、丁寧体基調場面におけるダウンシフトとして、「強い口ぶりで、念を押す時」、「職業規則を明示する時」、普通体基調場面におけるアップシフトとして、「実例を挙げる時」、「相手に同意・共感を示す時」、「1つの作業が終了時の合図」、「説明を諦める時」にもスピーチレベルシフトが観察された。3）機能は、構造標識、談話標識、待遇標識と心的距離の伸縮の4つに分類できる。さらに、4）スピーチレベルシフトには一回性のものと連続性のものがあり、場面によって現れ方が異なっていることが判明した。

【キーワード】　スピーチレベルシフト　鉄骨工場　日本人同僚　技能実習生

1．はじめに

厚生労働省によると、2022年10月末時点で日本における外国人労働者数は182万人にのぼる。そのうち18.8％は技能実習生である[1]。技能実習生の数はここ10年（2011年-2020年）で増加の一途をたどっている。また、人数の増加だけでなく、2017年11月1日から施行された「外国人の技能実習の適正な実施及び技能実習生の保護に関する法律（技能実習法）」により、それまで最大3年間とされていた技能実習期間が2年間延長され、最大5年となった。ゆえに、技能実習生に対する日本語教育の重要性も増している。しかし、「彼ら（技能実習生）の大半は日本語の初心者であり、しかも、来日後、原則2か月間の講習を受け

* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程（The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University）

た後、すぐ作業現場に身を投じ、実習を始め、勤務外で日本語を学習する時間がほとんどない」[2]（張2021：47）。また、従来の、技能実習生に関する研究は主として長時間労働、低賃金、人権侵害といった社会問題に注目しており、日本語教育面の研究、とくに、技能実習生とその同僚である日本語母語話者のコミュニケーションに焦点を当てたものは飯田（2020）、飯田（2021）、張（2021）などに限られる。「技能実習を効果的かつ安全に行うためには、日本語によるコミュニケーションが必要不可欠」（岸本2015：47）だと考えられるから、様々な側面から、技能実習生がどのような日本語に囲まれ、どのようにコミュニケーションをしているのかを明らかにすることが必要になると思われる。

本研究では、1つの糸口として、スピーチレベルシフトに着目する。本稿においては、日高・伊藤（2007）を踏襲し、スピーチレベルを「丁寧体と普通体という文末の『丁寧さ』に関する文体のレベル」、スピーチレベルシフトを「まとまった一連の談話の中で、異なるスピーチレベル間の切り換えが起きる現象」（日高・伊藤2007：1）とそれぞれ定義する。スピーチレベルシフトは、普通体から丁寧体への切り換え（以下、アップシフト）、或いは丁寧体から普通体への切り換え（以下、ダウンシフト）を扱うことが多い（生田・井出1983、三牧1993、宇佐美1995等）。日本語母語話者は場合に応じて、スピーチレベルシフトを巧みにすることができるが、日本語を母語としない学習者、特に、「敬語体系とスピーチレベル体系を有していない中国語を母語とする日本語学習者にとっては、上級になってもスピーチレベルを対話相手や場面に応じて使い分けることはなかなか難しい」（馮2020：70）。日本語ではスピーチレベルシフトによって、相手に親しみや配慮を表し、よりよいコミュニケーションができる。その一方、不適切な使用が不快感を与えることもある。ときに、異文化ミス・コミュニケーションが生じたり、摩擦や誤解まで招いたりしてしまうこともありうる。このようなことは技能実習生が実習実施機関で日本人同僚と一緒に働く際にも起こるはずだと考えられる。そこで、本研究では、スピーチレベルシフトに注目する。それを巧みにシフトさせることは、コミュニケーションをスムーズに進め、人間関係を円滑に保つことを可能にするからである。ゆえに、スピーチレベルシフトの研究は、技能実習生と日本人同僚との人間関係の改善につながるだろうと考えられる。

研究フィールドとして本研究は鉄骨工場を設定する。鉄骨工場を研究フィールドにしたのは、鉄骨が社会生産・生活の各領域で広く利用されており、国家の現代化及びその発展には、不可欠だと考えられるばかりか、鉄筋組立てを含む建設関係や鉄工作業を含む機械・金属関係といった職種の技能実習生は他の職種より多いと報告されているからである（法務省2022）[3]。なお、鉄骨工場では溶接や切断といった危険性を伴う作業が多いので、研究者が工場に入り、実地調査を進めることが難しい。そこで、鉄工職種に関する実地調査を行った研究は管見の及ぶ限り前述の張（2021）の限りである。しかし、実習実施機関が危ないところだからこそ、その現場で、技能実習生に対して、使われている日本語の特徴を明らかにすることは焦眉の課題だと思われる。

以上より、本稿は鉄骨工場を研究フィールドとし、そこで働く技能実習生に向けられた日本人同僚の発話を分析対象とし、スピーチレベルシフトに注目する。本稿の目的は、1）様々な場面に応じたスピーチレベルの割合の変化の記述、2）場面ごとのスピーチレベル

シフトの生起条件、3）スピーチレベルシフトの機能を明らかにすることである[4]。また、スピーチレベルシフトの生起条件と機能を考察する際、宇佐美（1995）のいう「ローカル要因」と「グローバル要因」のうち、「ローカル要因」に注目する[5]。

2．スピーチレベルに関する先行研究

日本語の会話におけるスピーチレベルに関する研究は盛んに行われてきたといえる。テレビやラジオの座談番組を資料とした生田・井出（1983）、三牧（1993）、足立（1995）、初対面の日本語母語話者の会話を資料とした宇佐美（1995）、日本語の講演の談話を資料とした谷口（2004）、上下の関係が明確なビジネス関係者初対面2者間の会話を資料とした福島（2008）、親しい友人同士3者間の会話を分析対象とした劉（2013）、同年齢かつ学生同士の2者間の同等初対面会話をデータとした嶋原（2014）、親しい大学生2者間の会話をデータとした酒井（2015）、同年代の友人同士や家族間といった親しい間柄で話される日常会話を分析対象とした高宮（2017）等が挙げられる。こうした従来の研究で指摘されているダウンシフトとアップシフトが生じうるそれぞれの生起条件について、表１にまとめる。

これら従来の研究はいずれも対面会話であるという点で一致している。しかし、使用データはテレビ番組や講演のような公的場面、または被験者の上下・親疎関係など、特定の条件を設定したものが大半を占める。接触場面の場合でも、取り上げられた対象は留学生に止まり、本稿と類似のテーマを持ち、なおかつ鉄骨工場のような実習実施機関で働く技能実習生を対象とした研究は管見の及ぶ限り存在しない。そのため、本稿は今までの談話分析におけるデータの層と幅を拡充させる点においても意義があると思われる。

表１　スピーチレベルシフトの生起条件[6]

スピーチレベルシフトの生起条件	ダウンシフト	アップシフト
①ユニットを移行する時	三牧（1993）	三牧（1993）、足立（1995）、宇佐美（1995）、嶋原（2014）
②情景描写の時	谷口（2004）	
③重要部分を明示・強調（繰り返しなど）する時	三牧（1993）、谷口（2004）、劉（2013）	三牧（1993）、酒井（2015）
④注釈・補足・独話などを挿入する時	三牧（1993）	三牧（1993）
⑤引用を示す時	谷口（2004）	
⑥列挙（具体例など）を示す時	生田･井出（1983）、谷口（2004）、福島（2008）	
⑦常套句・会話終了時を合図する時		劉（2013）
⑧相手の普通体／丁寧体に合わせる時	宇佐美（1995）	福島（2008）、嶋原（2014）
⑨普通体の発話の後、丁寧体に戻る時		宇佐美（1995）、福島（2008）
⑩独り言・自問をする時	生田･井出（1983）、宇佐美（1995）、福島（2008）	
⑪中途終了型発話	宇佐美（1995）	
⑫語彙の丁寧度の低さを補償する時		嶋原（2014）
⑬解釈・説明をする時	福島（2008）	福島（2008）、酒井（2015）
⑭質問・反問・確認をする／される時	宇佐美（1995）、福島（2008）	酒井（2015）
⑮相手に同意・共感を示す時	生田・井出（1983）、足立（1995）	
⑯相手に同意・共感を求める時		酒井（2015）、高宮（2017）

⑰聞かれた質問へ解答する時	宇佐美（1995）	宇佐美（1995）
⑱話し手の判断・意見・推測を示す	足立（1995）、谷口（2004）、劉（2013）、酒井（2015）	
⑲相手の気持ちを配慮する時		足立（1995）、嶋原（2014）、酒井（2015）
⑳対立の意見を示す時	酒井（2015）	劉（2013）、高宮（2017）
㉑不満や非難の意を示す時		劉（2013）、高宮（2017）
㉒否定的な内容を伝達する時	酒井（2015）	酒井（2015）
㉓親しみ（冗談・称賛など）を示す時	生田・井出（1983）、宇佐美（1995）、酒井（2015）	嶋原（2014）

3．調査の概要

3．1　分析対象について

本研究の協力機関は、建設規模が最も大きく、使用鋼材には制限がない、Sグレード[7]と位置付けられる大規模な機関である。従業員は約200人にのぼる。主な業務内容は、鉄骨、橋梁、鉄塔、プラントなど各種の鉄鋼材料を設計、製作ならびに修理である。

本稿の目的を達成するために、まず、協力機関側（鉄骨工場）に本研究の意義、目的、依頼事（仕事の開始から終了までの会話録音を依頼すること）を口頭で説明し、協力機関側の理解を十分に得た。また、調査協力者[8]（中国人技能実習生8名[9]）及び一緒に工場で働く作業員（日本語母語話者）にも同内容を口頭で説明し、理解を得た。次に、協力機関向けと協力者向けの正式的な書面資料（「依頼書」、「研究倫理に関する契約書」）を送付し、それぞれから「研究承諾書」を得た。なお、協力者向けの各書面資料はすべて、中国語版を提示した。また、所属大学において倫理審査を受け、その承認を得た。

録音調査はパイロット調査と本調査に分け、前者は2019年5月17、18日、後者は2019年10月～11月の約12日間、それぞれ実施した。その中から、約43時間の有効データを得、それを文字化[10]した。

文字化した資料の中で、日本語母語話者による発話に注目し、発話文数を集計した。1発話文かどうかを認定する基準については、宇佐美まゆみによる「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）2019年改訂版」（以下「BTSJ」）に基づいて認定した。なお、スピーチレベルシフトの生起条件や機能を明らかにするためには、発話内容の文脈からの考察が不可欠であるため、聞き取れないことで、発話前後の文脈の推測に影響を与える部分は除外した。

その結果、分析対象として計1968発話文が得られた。この1968発話文は、朝礼、会議、送別会、作業現場、昼休みなど、様々な場面におけるものである。具体的には、朝礼164（約53分間）、会議100（約7分間）、送別会55（約38分間）、作業現場の会話1584（約41時間）（詳細は媒介者（通訳者）参加959（約190分間）、媒介者なし625（約38時間））、昼休み65（約32分間）の発話文から構成される。

3．2　スピーチレベルの認定基準

本稿では、日高・伊藤（2007）を踏襲し、丁寧体か普通体かについての認定基準を表2の通りに設定する。丁寧体、普通体のどちらにも属さないものは「その他」に属するものとする。ただし、日高・伊藤（2007）では、「その他」の①は、「名詞で文が終わっているもの」（日高・伊藤2007：4）と名詞のみが取り扱われているが、「大丈夫。」のような形容

表２　スピーチレベルの認定基準[11]

	項目	例
丁寧体	①名詞/形容動詞語幹/形容詞＋です（でした/でしょう）	あんまり強くやることはないです。
	②動詞＋ます（ました/ましょう/ません）	飛ばします。
	③①・②＋終助詞	これも、やりましたね。
	④①・②+接続助詞の文末用法（＋終助詞）	こうやってやれば出ますからね。
	⑤丁寧な依頼形「～してください」（＋終助詞）	ここまでやってください。
普通体	①名詞/形容動詞語幹＋だ（だった/だろう/ではない）	必要だ。
	②形容詞の言い切り形（現在形/過去形）	いい。
	③動詞の言い切り形（現在形/過去形/意向形/命令形）	ここのゲージが見える。
	④①・②・③+終助詞	よく聞いとけよ。
	⑤①・②・③+接続助詞（て/から/ので/けど/が/し）の文末用法（＋終助詞）	ねじがこうなるからね。
	⑥名詞/形容動詞語幹＋終助詞	これは左ね。
	⑦くだけた依頼形「～して」/「～してくれ」（＋終助詞）	半分で区切ってやってくれ。
その他	①名詞/形容動詞語幹で文が終わっているもの	大丈夫。
	②名詞に格助詞/取り立て助詞が付いて文が終わっているもの	ここも。
	③感嘆詞、接続詞、副詞などによる一語文	まっすぐ。
	④①・②・③以外の述語が省略されている文	この手がこっちのほうに…。
	⑤丁寧さのレベルが認定しにくいもの	これ、やらなきゃ。

動詞語幹もこれに属するのではないかと判断し、この項目に形容動詞語幹も属するものとする。

以下、本稿のデータでは、普通体と判断できる部分に下線「____」を、丁寧体と見なす部分に二重下線「____」を引く。（表２の例はすべて本稿用文字化資料からのものである。）

３．３　基調場面とスピーチレベルシフトの対応関係

スピーチレベルシフトを分析するためには、各分析対象の「基本的スピーチレベル」を明らかにしなければならない。三牧（2013）では、中途終了型発話（本稿では「その他」）を除き、丁寧体と普通体の2種類の分布に注目し、片方の使用率が50%以上であれば、それが基本的スピーチレベルとされている。本稿では、三牧（2013）を踏襲し、ある場面で丁寧体の使用率が50％以上であれば、それを丁寧体基調場面[12]とする。それに対し、普通体の使用率が50％以上であれば、それを普通体基調場面とする。

表２のスピーチレベルの認定基準に則ると、3.1で述べた分析対象のうち、朝礼、会議、送別会[13]のような大勢の人が集まる場面からのデータ（計319発話文）を丁寧体基調場面に、作業現場の会話と昼休み[14]からのデータ（計1649発話文）を普通体基調場面に分けることになった。なお、普通体基調場面においては、日本人同僚（以下「J」と記す）と技能実習生（以下「C」と記す）2者間の談話以外に、時折、媒介者（以下「B」と記す）が入っている場合もある。媒介者とは、作業現場で通訳をする協力機関（鉄骨工場）の正社員である。このような場合、スピーチレベルに影響を与える可能性があるため、普通体基調場面を分析する際、媒介者がいる場合（以下「J→B（C）」[15]）といない場合（以下「J→C」）に分けて分析を行っている。丁

表３　基調場面のスピーチレベルの割合

基調場面		発話文数	丁寧体	普通体	その他
丁寧体基調場面		319	269（97.5%）	7（ 2.5%）	43
普通体基調場面	J→B(C)	959	247（37.9%）	405（62.1%）	307
	J→C	690	20（ 5.0%）	379（95.0%）	291

寧体基調場面と普通体基調場面それぞれからのデータの使用頻度は表３の通りになる。

表３から、丁寧体基調場面にせよ、普通体基調場面にせよ、同一のスピーチレベルが発話開始から終了まで保持されるわけではなく、混用されていることが見られる。すなわち、丁寧体基調場面では、普通体より丁寧体のほうが圧倒的に使われているのに対し、普通体基調場面では、J→B（C）の場合はJ→Cの場合より、丁寧体の使用率が高いが、どちらも普通体が基本的スピーチレベルとして使われていることがうかがえる。

そこで、本稿では、スピーチレベルシフトを分析する際に、丁寧体基調場面についてはダウンシフトに、普通体基調場面（J→B(C)、J→C）についてはアップシフトに注目することとする。また、スピーチレベルシフトの回数を集計する際、丁寧体基調場面については、文末に普通体が表れたところに着目し、その直前の同一話者による発話が丁寧体であれば、その普通体への移行を1シフトと数える。普通体基調場面については、丁寧体基調場面とは反対に、文末に丁寧体が表れたところに着目し、その直前の同一話者による発話が普通体であれば、その丁寧体への移行を1シフトと数えた。

4．分析

本節では、丁寧体基調場面と普通体基調場面に分けて、分析する。

4．1　丁寧体基調場面

朝礼・会議・送別会の場面では、丁寧体を基調として発話が進められている（表３）が、丁寧体から普通体へのダウンシフトが7回認められた（朝礼3回、会議2回、送別会2回）。これらのダウンシフトは①親しみ（冗談、称賛など）を示す時（2回、送別会）、②強い口ぶりで、念を押す時（2回、会議）、③職業規則を明示する時（1回、朝礼）、④相手に同意・共感を求める時（1回、朝礼）、⑤中途終了型発話（1回、朝礼）の5つがある。機能については、心的距離の伸縮（①）、待遇標識（②，④）と談話標識（③，⑤）の3つが考察できる。

まず、①のデータ（発話例1、発話例2）を挙げる。

＜発話例1・送別会＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	＊	J1	皆さん、3年間お疲れ様でした。
2	＊	J1	リーダーとして、僕はね、＃＃＃＃＃、ありがとうございました。
3	＊	J1	やっぱり3年というもの、長い時間経ったので、＃＃＃＃＃＃＃頑張って、使ってください。
4	＊	B	**说3年的时间不算短，在这儿学的东西回去之后继续发挥它的作用**。（3年間は短い時期ではないです。ここで学んだものを帰国したら、引き続き活用できるようにしてくださいと言いました。）

5	*	J1	非常にね、野菜作るのはお上手で、落花生おいしかったです。
6	*	B	**然后说大家种菜种的特别好，花生特别好吃**。（それで、みなさんが植えた野菜はとてもよくて、落花生もとても美味しかったと言いました）。
［みんなの笑い声］			
7	*	J1	すいかもめちゃくちゃ甘かった。
8	*	B	**然后说西瓜也很甜**。（それで、すいかもとても甘かったと言いました。）
［みんなの笑い声］			
9	*	J1	後はね、本当に、＃＃＃C1さんはね、前歯を3本ほど、歯医者に＃＃＃＃＃＃。
10	*	B	**然后说唯一一点呢，就是C1大门牙少了3颗，有点遗憾**。（それで、唯一の遺憾として、C1さんは前歯が3本落とされたことだと言いました。）
11	*	J1	他の多くの人が無事で、ありがとうございました。
12	*	B	**其他人没有受伤的，非常感谢**。（他の人は怪我がなくて、ありがとうございましたと言いました。）

＜発話例2・送別会＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	*	J2	で、18日はA副工場長とE部長が一緒にバスに乗って、空港まで行ってくれます。
2	*	B	**然后18号A副工厂长跟E部长一起去机场**。（それで、18日に、A副工場とE部長が一緒に空港まで行きます。）
3	*	J2	なおかつ、同じ飛行機に乗って、この2人はファーストクラスに乗ります。
4	*	B	**然后他两跟大家一起坐同一班飞机到青岛**。（それで、2人はみなさんと一緒に同じ飛行機で青島に行きます。）
5	*	J2	まあ、中国語でしゃべったら、この2人はわからへんよ。
6	*	B	**讲汉语的话他两也听不懂**。（中国語でしゃべったら、2人は聞き取れません。）
［みんなの笑い声］			
7	*	J2	ちょっと私、本当に寮で見送りに行きたかったって、ちょっと出張が入ってしまっていけないんで、私は今日で、皆さんとお別れになります。
8	*	B	**本来他想去送大家，但是18号他要去出差，他就不去宿舍了**。（もともと彼はみなさんに見送りに行きたいですが、18日は出張に行かないといけないので、寮には行かないです。）

発話例1、発話例2は3年間の技能実習を修了した、当該協力工場の技能実習生1期生[16]のために、送別会上で行われたダウンシフトである。どちらも発話直後に聞き手からの笑い声があることが観察された。送別会であるため、発話内容は主に技能実習生に関するもので、彼らの3年間の実習成果への評価や彼らへの今後の期待であり、時折、笑い声や拍手があがっていることが音声データから観察された。そのため、全体的にはリラックスした雰囲気で行われたと判断できる。「発話内容」列からわかるように、送別会のような公的場面で、全体に向けて発話していたため、話し手J1もJ2も丁寧体を基調としている。にもかかわらず、丁寧体から普通体にシフトした箇所が見られる。

発話例1は、話し手（J1）が技能実習生に3年間の実習に関して、感謝の気持ちを表すとともに、「すいかもめちゃくちゃ甘かった」（発話文番号7）のように、「甘かった」という褒め言葉を使い、友好や親しみを示す時、生じられたダウンシフトである。ここ（発話例1）では、「野菜作る」「落花生」「すいか」といった農業に関する言葉が出てきたのは出

稼ぎに来日した技能実習生の生活上の経済負担を少しでも軽減するために、当該協力機関（鉄骨工場）が野菜畑を用意して、無料で技能実習生に野菜や果物を自由に植えさせた背景があるからである。技能実習生が植えた野菜や果物を日本人同僚にも共有したため、J1は送別会で感謝の意を表したわけである。発話例2は、「わからへん」（発話文番号5）のような方言で冗談を言う時に、行われたダウンシフトである。発話内容からみると、「中国語でしゃべったら、この2人はわからへんよ」（発話番号5）から、同じ飛行機で乗る際、A副工場とE部長はどうせ中国語がわからないため、何か（例えば、悪口）を言っても聞き取れないよとJ2は冗談で技能実習生に伝わりたかったのではないかということが推測できる。それに、録音データからその発話直後（発話番号5）に聞き手の笑い声が聞こえるのも「わからへん」がJ2は冗談で言っている根拠になるだろう。

以上より、発話例1と発話例2どちらも親しみを示し、現場の雰囲気を和らげることを通し、技能実習生との心的距離を縮める機能を果たしていると考えられる。

次に、②（発話例3）、③（発話例4）、④（発話例5）、⑤（発話例6）のデータを挙げる。

＜発話例3・会議＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	*	J3	あと一つ続きですが、＃＃＃＃＃＃組立の人は革手、軍手を濡れないところに直してください。
2	*	J3	スケールも。
3	*	J3	ねえ、みんな置いとるね。
4	*	J3	濡れたら、代わりのものをもらえるから、そういう考えをやめて、どんどんどんどん赤字を使うと、それだけで会社に負担がかかります。
5	*	J3	消耗品だけど、ぎりぎりまで使うように使ってください。

＜発話例4・朝礼＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	*	J4	おはようございます。
2	*	Cみんな	おはようございます。
3	*	J4	11月14日、木曜日です。
4	*	J4	本日、特に連絡事項はございませんが、ちょっと今朝礼で、前にいてハンドポケットされていると、かなり気になります。
5	*	J4	あのう、やっぱり安全意識というところでは、あのう、歩行中、ポケットに手は入れない。
6	*	J4	これはあのう決められております。
7	*	J4	本人一人一人のやっぱ安全意識っていうところにもつながりますので、あのうぜひ皆さん、するようにお願い致します。

＜発話例5・朝礼＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	＊	J5	ええ、本日11月14日という日はどういう日なのか、調べてみたら、まあ語呂合わせで出てくるいい石の日。
2	＊	J5	これは石職人が聖徳…あ、聖徳太子の命日でもあるということで、まあ、語呂合わせだけでもないんだなっていうのでちょっと出しました。
3	＊	J5	まあ、本日11月の第二木曜日。
4	＊	J5	これはただ、世界勝負の日ということで。
5	＊	J5	これはええ＃＃＃＃＃されてるそうです。
6	＊	J5	一つ一つ小さなことでも挑戦してみるじゃん。
7	＊	J5	本日はよい日ではないかと思います。

＜発話例6・朝礼＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	＊	J6	おはようございます。
［スピーカーで対面ではないはず］			
2	＊	Cみんな	おはようございます。
3	＊	J6	本日の連絡事項は特にありません。
4	＊	J6	今日は台風の影響は少ないので。
5	＊	J6	ええ、台風の影響は少ないですが、風が強く、午後からは雨が降るので、風対抗をしっかり行いましょう。
6	＊	J6	それでは、本日の作業をご安全に。
7	＊	Cみんな	ご安全に。

②～⑤は会議と朝礼で行われたダウンシフトである。今回のデータにおいては、朝礼と会議の発話内容は主に、連絡事項や注意事項の伝達に関するものである。そのため、笑い声や拍手の音が1か所もなく、発話全過程で話者の声以外に、他の音や声がほとんどない。送別会のようなリラックスした雰囲気ではなく、静かな空気の中で発話が進められている。発話例3の「みんな置いとるね。」（発話文番号3）のように、話し手（J3）が聞き手に念を押す時、丁寧体から普通体にシフトした。発話例4の「ポケットに手は入れない。」（発話文番号5）は、話し手（J4）が工場のルールをそのまま明示・強調する際、行われたダウンシフトである。また、「ポケットに手は入れない。」をその直後（発話文番号6）の「これ」が受けているため、ここでのダウンシフトは普通体が表す部分が従属節に近い内容を表しているからという文法的な側面もあると思われる[17]。なお、前後の発話内容から、発話例3では「赤字」や「負担がかかる」のような否定的な言葉、発話例4では「かなり」「ぜひ」のような副詞が使われていることから、話し手（J3、J4）の強い口調が感じられるだろう。それに、実際の音声データから、話し手（J3、J4）が強い口調で、発話を進めたことも観察された。発話例5は、話し手（J5）が実例を出したうえで、「～じゃん。」（発話文番号6）という語尾表現で、聞き手の共感を求める、あるいは喚起する際に生じたダウンシフトである。発話例6は、話し手（J6）が朝礼で天気に関する発話をした際に行われたダウンシフトである。発話内容から、発話文番号5が発話文番号4の内

容訂正になるとわかり、発話文番号4は「…少ないので。」と文が中途終了のままであると判断できる。一方、発話文番号5における「午後からは雨が降るので、風対抗をしっかり行いましょう。」については、「主節が続き、それが丁寧体を含んでいれば、従属節内は常体でよい」（宇佐美1995：35）ため、前件でのダウンシフトには特に深い意味はないだろう。しかし、このような文法レベル[18]の要因によって行われたスピーチレベルシフトはこれまであまり重視されてこなかったからこそ、学習者にとっては特に難しいことが指摘されており（野田2009）、「日本語能力が非常に高い非母語話者でもデスマス形と非デスマス形の選択が適切にできない例は、ほとんど文法レベルの要因によるもの」だと述べられている（野田2009：115）。

機能については、発話例3の発話内容から、J3が日本人同僚と技能実習生に工場の消耗品の使用について指摘をしていることがわかり、さらに、音声データからJ3の強い口ぶりも感じられた。そこで、発話例3でJ3は強い口ぶりで聞き手に念を押したため、発話文番号3で切り替えられたダウンシフトは待遇標識の機能を果たしているのではないかと思われる。発話例4はJ4がまず、「朝礼で、前にいてハンドポケットされている」（発話文番号4）ことを指摘したうえ、「歩行中、ポケットに手は入れない」（発話文番号5）という職場のルールを提示した。発話文番号6の「これ」がもちろん「歩行中、ポケットに手は入れない」というルールを指すとわかる。そこで、発話例4におけるダウンシフトは発話の展開を示す談話標識[19]の機能を果たしていると考えられる。発話例5の「～じゃん。」という語尾表現は聞き手の共感を求める、あるいは喚起する際に生じたダウンシフトであるため、聞き手向けの待遇標識の機能を果たしているといえよう。また、発話例6は発話文番号5から、話し手J6がその直前の発話内容（発話文番号4）を自己修正としていると読み取れる。そのため、この発話例でのダウンシフトは発話の展開を示す談話標識の機能を果たしているだろう。

４．２　普通体基調場面

４．２．１　J→B(C)

日本人同僚、媒介者、技能実習生3者間の会話データでは、日本語母語話者の発話に生じたアップシフトは全97回認められ、それらの生起条件として、16種が観察された。機能については、談話標識、待遇標識、心的距離の伸縮と構造標識の4つに分類できる（表４）。

ここでは、アップシフトが行われた16の生起条件のうち、割合が10%以上の場合に注目し、分析する。まずは、①「客観説明をする時」を発話例7に挙げる。

発話例7では、日本人同僚（J7）は技能実習生にガス溶接用の道具についての検査方法を教えている。吸い込み検査を教え終えたのち（発話文番号4まで）、発話文番号5では、漏れ検査にユニットを移行し、説明を始めた。機能については、ユニットを移行し、客観的に説明を進める談話標識の機能を果たしていると考えられる。

次に、③「解釈説明をする時」を発話例8に挙げる。

発話例8では、日本人同僚（J8）は技能実習生によく溶接できていないところを指導している。発話文番号5で、J8は技能実習生に、溶接する際、トーチをしっかり持たないと、溶接線が斜めになってしまい、溶接金属の幅が大きすぎると解釈している際、生じたアップシフトである。福島（2008：68）では、「丁寧に説明しようとする場合は、ダ体からデス

表４　アップシフトの生起条件と機能

機能	アップシフトの生起条件	アップシフトの割合	「普通体発話」の割合
談話標識	①客観説明をする時	12（12.4%）	112（27.7%）
	②実例を挙げる時	6（6.2%）	4（1.0%）
待遇標識	③解釈説明をする時	14（14.4%）	70（17.3%）
	④依頼、請求、命令、指示をする時	16（16.5%）	29（7.2%）
	⑤勧誘、提案をする時	6（6.2%）	2（0.5%）
	⑥質問・反問・確認をする時	4（4.1%）	57（14.1%）
	⑦相手に同意・共感を示す時	4（4.1%）	3（0.7%）
	⑧相手に同意・共感を求める時	3（3.1%）	2（0.5%）
	⑨聞かれた質問へ解答する時	2（2.1%）	2（0.5%）
	⑩語彙の丁寧度の低さを補償する時	15（15.5%）	73（18.0%）
心的距離の伸縮	⑪親しみ（冗談・称賛など）を示す時	2（2.1%）	3（0.7%）
	⑫不満や非難の意を示す時	2（2.1%）	10（2.5%）
	⑬否定的な内容を伝達する時	2（2.1%）	6（1.5%）
	⑭対立の意見を示す時	1（1.0%）	0
構造標識	⑮ 1つの作業が終了時の合図	5（5.2%）	4（1.0%）
	⑯常套句、会話終了時の合図	3（3.1%）	0
合計		97（100.0%）	377（93.2%）[20]

＜発話例7・作業現場＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	＊	J7	これで、初めてこんなやつが使えるとわかった。
2	＊	J7	そうしたら、ここで使えるとわかった。
3	＊	J7	ここで、入れる。
4	＊	B	**然后装上**（それから入れる）[21]。
5	＊	J7	入れたら、ここで、ここの漏れ検査です。
6	＊	B	**检查啊**（検査だよ）。
7	＊	J7	だから、1ヵ所、2ヵ所、3ヵ所、4ヵ所、5ヵ所、6ヵ所、全部で6の点検が必要なんです。
8	＊	B	**一共检查6个地方啊**。（検査が全部で6ヵ所あるだよ。）

＜発話例8・作業現場＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	＊	J8	Bくん、電話持っていない↑。
2	＊	B	今、持っていない。
3	＊	J8	まあ。
4	＊	B	止まりすぎじゃない？
5	＊	J8	別、最初はたぶん本人もやりよるから、だんだん斜めになってくると、開先側はオーバーして脚長過大[22]になるんですけど。
6	＊	J8	それは擦ってごまかしていいから最初は＝。
7	＊	J8	とにかく、こことここ溶かせ。
8	＊	J8	パス数重ねるうちに、だんだん難しくなるけど。
9	＊	J8	ちゃんとそれ、わかってくれんや、実際できていないから。

マス体へシフトをしなければ表せない」と指摘されているように、話し手が聞き手に発話内容を理解させる、または理解させやすくするために、丁寧に説明をしようとする気持ちが読み取れるから、待遇標識の機能を果たしていると考えられる。

また、④「依頼、請求、命令、指示をする時」のデータ（発話例9、発話例10）を挙げる。

発話例9では、日本人同僚（J9）は技能実習生にガスボンベのバブルの調整方法について説明している。発話例10では、日本人同僚（J10）は技能実習生に溶接の際に狙う場所を確認している。発話例9のような命令・指示、また、発話例10のような丁寧な依頼を示す時、話し手が聞き手の行動を求めるために行われたアップシフトである。このような場合は聞き手向けの発話で、対人的な配慮を示す待遇標識の機能を果たしうると考えられる。

それから、⑩「語彙の丁寧度の低さを補償する時」のデータ（発話例11）を挙げる。

＜発話例9・作業現場＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	*	J9	で、これ左だ。
2	*	J9	OK↑。
3	*	B	**然后这是往左转的啊**。（それで、これは左に回すよ。）
4	*	J9	左で回したんだろう。
5	*	J9	はい、これも左に回しといてください。
6	*	B	**那个然后也关上啊**。（それも閉めてね。）
7	*	J9	なあ、これが見える程度。
8	*	J9	なあ、せんかったら、困るから。

＜発話例10・作業現場＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	*	J10	下向きの考えと全然違うから。
2	*	B	**横焊跟平焊完全不一样**。（横向きと下向きは全然違います。）
3	*	J10	パス数を重ねれば重ねるほど取る場所が多くなる。
4	*	B	うんうん。
5	*	J10	この場合、C2さんはどこを溶かすか。
6	*	J10	聞いてもらえますか。
7	*	B	**然后说你要把每一段化开。这个地方？**（それで、各場所を溶かすと言いました。この場所？）
8	*	C2	**嗯，对**。（うん、そうそう。）
9	*	B	**然后呢、这些地方都要化开**。（それで、これらの場所も全て溶かすよ。）
10	*	J10	次の一パス目はここととここを狙う。
11	*	J10	ここととこと狙ったら、次はここととこを狙う。

＜発話例11・作業現場＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	*	J11	これなっちゃったら、肉（溶融金属）[23]が＝。
2	*	J11	振って、いいよね。
3	*	J11	/沈黙3秒/振ったほうがいいけど。
4	*	J11	ここに行くと、当たるかなあって。
5	*	B	あああ、**然后刚才那个你摆的好，但是你摆的稍微有点往上挑了**。（それで、今あなたがよく振った。が、ちょっと上に振りすぎた。）
［Bの話しがまだ終わってない状態で］			
6	*	J11	今のは、絶対振らないとだめです。
7	*	B	**嗯，那个必须得摆，明白了吗？**（うん、それは振らないといけないです。わかりましたか。
8	*	J11	これが、＃＃＃かけて、もうちょっと考えて。

発話例11では、日本人同僚（J11）は技能実習生のよく溶接できていないところについて指摘している。発話文番号6で使われている「だめ」は丁寧度の低い語彙、すなわち俗語である[24]。話し手（J11）が自分の判断や意見を直接的に表現させるとともに、このような「語彙の丁寧度の低さを補償する」ために、「相手への待遇が著しく低くなることを避けている」（嶋原2014：71）のである。今回のデータには、丁寧度の低い語彙として、「だめ」以外に、「まじ」や「やばい」などがある。この場合（⑩）も聞き手向けの発話で、④の発話例9、発話例10と同じように、対人的な配慮を示す待遇標識の機能を果たしていると考えられる。

宇佐美（1995：37）は、「条件が整えば、いつでもスピーチレベルシフトが生じるかというと、そうではない」と指摘している。さて、これらの場合（①③④⑩）において、なぜ、無視できない割合でスピーチレベルシフトが生じるのだろう。その主な原因は、J→B（C）3者間の発話場面では、媒介者がいるためではないかと思われる。文字化資料を確認したところ、媒介者がいる場合は、すべて、日本人同僚が技能実習生に作業のやり方や手順を教える説明場面や技能実習生のやった作業について指摘している場面である。そこで、丁寧な説明を通し、聞き手により理解させる場合や指摘している際に、丁寧度の低い語彙を補償する場合にはアップシフトされやすい。また、日本人同僚は媒介者に通訳を依頼する場合はアップシフトされやすい。ここでは、表4の「アップシフトの割合」と「普通体発話の割合」を比較し、その開きが最も大きい①「客観説明をする時」（15.3%）[25]と④「依頼、請求、命令、指示をする時」（9.3%）を例として、アップシフトする時としない時のそれぞれを考察する。そうすると、①は作業手順の説明方法によって、④は相手の立場によって、アップシフトするかどうかに影響を与えることがわかった。

まずは、作業手順の説明方法がアップシフトするか否かに影響するという点の例証として、発話例12、発話例13を挙げる。

＜発話例12・作業現場＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	*	J12	はい、3ヵ所、4ヵ所、5ヵ所、はい、で、ここ5ヵ所だ。
2	*	J12	OK？そこ後で直して。
3	*	J12	ね、もうちょっと閉まって。
4	*	J12	はい、ここで、何をやるかと言ったら、このバーナーが使えるかどうかの吸込みチェック。
5	*	J12	さっき、南設定よな。
6	*	J12	ここやって、ここやって＝。
7	*	B	**就是看看这个能不能用啊**。（これが使えるかどうかを見るのです。）
8	*	Cみんな	**嗯嗯**。（うんうん。）
9	*	J12	OK？はい、［大きな声で］ここまでやってきて。
10	*	J12	OK、終わりました。
11	*	J12	そうしたら、ここにこれを入れて、はい、これを入れて。
12	*	J12	ここでまたチェック。

＜発話例13・作業現場＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	*	J13	はい、ここやったら、ここでですね、この酸素、加熱、あのう予熱酸素です。
2	*	J13	ここ思い切り＃＃＃ます。
3	*	J13	そして、ここに入れます。
4	*	B	**这是预热的啊**。（これは予熱ですよ。）
5	*	J13	それで、吸込み検査っていうのがあります。
6	*	J13	ここに、あのう、例の針がついてるやつで、検査なんです。
7	*	J13	ちょっと見て。
8	*	J13	触ってみて。

発話例12では、日本人同僚（J12）は技能実習生にガスの漏れチェックを教えている。発話例13では、日本人同僚（J13）は技能実習生にガス切断や吸い込み検査の方法を教えている。発話内容から、発話例12は1つの作業手順を一気に指導/説明した直後の終了合図であるのに対し、発話例13は作業手順を段階的に指導/説明しているものであるとわかる。前者（発話例12）は、作業手順は普通体が連続で使用され、「OK、終わりました。」という終了時の合図を出す際だけが丁寧体となり、アップシフトが生じている。一方、後者（発話例13）は、作業手順の説明の段階からアップシフトが生じている。メイナード（2001）では、会話のインタラクションを3つの形[26]に分け、そのうちの「相手無視型」は「裸のダ体」が用いられ、相手が「意識しない、する必要がない、またはする余裕がない場合」（メイナード2001：39-40）だとしている。作業手順を一気に説明する場合が「相手無視型」だとすると、発話例12でも普通体が用いられているため、メイナード（2001）の主張と一致することになる。一方、発話例13の場合は、各ステップをゆっくり丁寧に説明していくことから、相手に作業の手順をよりよく理解できるように、アップシフトが生じたのではないかと考えられる。

次に、相手の立場がアップシフトするか否かに影響するという点の例証として、発話例14、発話例15を挙げる。

発話例14と発話例15では、日本人同僚は技能実習生に溶接の際に狙う場所について確認している。発話例14の「聞いてもらえますか。」（発話文番号6）のように、媒介者向けの依頼であれば、丁寧体を使うのは一般的である。これに対し、発話例15の「常に描いてほしい」（発話文番号2）のように、技能実習生向けの依頼であれば、普通体が使われるのが一般的である。

しかし、媒介者向けの発話ならばどのような場合でも、丁寧体にされるというわけではない。たとえば、発話例16のようなものがある。

発話例16では、日本人同僚J16が技能実習生に溶接方法を教えている。発話内容から、J16は溶接方法を教え、媒介者Bが技能実習生C4に通訳したが、C4がJ16の教えた通りに、できていなかったことが読み取れる。そこで、J16はBに「Bちゃん、やっぱ肉は上から、こう下がっているのに、ずっと、何のスペースもないよ。」とC4の文句を言った（発話文番号8）。この発話文から日本人同僚は媒介者に技能実習生の文句や非難を言う際、スピーチレベルを普通体にする現象が見られた。熊取谷（1996）では、普通体から丁寧体へスピーチレベルをシフトした場合、話し手が聞き手との間に距離を置きたい（現時点で聞き手を「ウチ」扱いしない）としているが、このケースでは、それと反対に、話し手が丁寧体から普通体へシフトしたため、媒介者を仲間として、ウチ扱いしているのではないかと考えられる。

＜発話例14・作業現場＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	*	J10	下向きの考えと全然違うから。
2	*	B	**横焊跟平焊完全不一样**。（横向きと下向きは全然違います。）
3	*	J10	パス数を重ねれば重ねるほど取る場所が多くなる。
4	*	B	うんうん。
5	*	J10	この場合、C2さんはどこを溶かすか↑。
6	*	J10	聞いてもらえますか。

＜発話例15・作業現場＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	*	J15	描いてもらう理由は、あのう、どういうところ狙って溶接やりよるか、自分はちょっとわからないから、描いてもらったら、後あっている、あっていないかわかるけん。
2	*	J15	常に描いてほしい。
3	*	B	**然后为什么要你画呢，然后过会，他到时候看看你这个东西瞄准了哪个位置，他会再看，再确认一下**。（それで、どうしてあなたに描いてほしいのか、後、彼はあなたがどこに狙っているのかを見て、彼はもう一度見て、確認するのです。）
4	*	J15	これどことどこ狙ってこういうふうに＝。
5	*	B	**然后，你现在要瞄哪个地方？**（あなたは今どこに狙っているのですか。）
6	*	C3	**这儿**。（ここ。）

＜発話例16・作業現場＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	＊	J16	そうやって、考えてやるのが＝。
2	＊	B	**然后考虑着来怎么焊，明白了吗？**（それで、どのように溶接するのかを考えてね。わかりましたか。）
3	＊	C4	**嗯嗯**。（うんうん）
4	＊	J16	何も考えなく、やったら、たぶんだめだから。
5	＊	J16	今考えるのはいいと思うけど。
6	＊	J16	自分はやっぱ振ったほうがいいと思うかな。
7	＊	B	**然后他觉得这个地方摆一摆比较好…。接着焊**。（それで、彼はここを振ったほうがいいと思っている。溶接し続けてください。）
［10秒後］			
8	＊	J16	Bちゃん、やっぱ肉は上から、こう下がっているのに、ずっと、何のスペースもないよ。
9	＊	B	**然后说这个肉都往下落了，都往下淌开了，你还是没分开距离**。（それで、この肉は下へ落ちてきて、下へ流れてきたのに、あなたはまだ距離を分けていないんだと言いました。）

４．２．２　J→C

日本人同僚と技能実習生2者間の会話データでは、日本語母語話者の発話に生じたアップシフトは20回認められ、それらの生起条件として、①質問・反問・確認をする時（8回）、②聞かれた質問へ解答する時（6回）、③親しみ（冗談、称賛など）を示す時（4回）、④説明を諦める時（1回）、⑤否定的な内容を伝達する時（1回）の5つである。機能については、待遇標識（①，②）、心的距離の伸縮（③，④，⑤）の2つが考察できる。

まず、①，②のデータをそれぞれ発話例17、発話例18に挙げる。

＜発話例17・作業現場＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	＊	J17	うん、あ、こんなところだけｒ[27]。
2	＊	C5	うん、うん、わかる、わかる。
3	＊	J17	あっちないでしょう、ないでしょう↑。
4	＊	C5	ｒ、ｒない。
5	＊	J17	はいはい、どうしょうか、どうしょうもない。
6	＊	J17	後メーカ呼んで、メーカお願いするしかないんだけど＝。

＜発話例18・作業現場＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
［溶接の音］			
1	＊	C6	広い、広い。/沈黙3秒/ない↑。ある↑。
2	＊	J18	あります、たくさんあります。
［溶接の音］			

発話例17では、切断機の不具合でできた傷について技能実習生が日本人同僚に報告し、日本人同僚が確認している。発話例18は前後の発話のみからではどのような作業が行われているのかがわかりにくいが、協力機関の関係者に音声データの確認を依頼したところ、次のような状況がありうるということであった。溶接作業の途中で、技能実習生C6は突然「広い、広い。」と声を出した（発話文番号1）。ここでの「広い、広い。」はC6は自分の溶接した部分が広すぎることに気づいたための、独り言のはずだと考えられる。そこで、少し沈黙したところ、一緒に作業をしているJ18に描く手振りをしながら、「ない↑。ある↑。」と聞いた。C6が欲しかったのは石筆であり、石筆を使って溶接の範囲を描きたかったと考えられるが、「石筆」という日本語が話せない。J18はC6の手振りを見たら、石筆がほしいと直ちにわかり、「ありますたくさんあります。」と答えたのである（発話文番号2）。

発話例17のような技能実習生への質問（①）、また、発話例18のような技能実習生からの質問に答える時（②）どちらも聞き手向けの発話であり、しかも、話し手が伝えたいことを丁寧体で2回繰り返していることが観察できる。このことにより、発話例17は聞き手によりよく理解させたいものであり、発話例18は技能実習生からの質問に対し、「ある」ということを聞き手（技能実習生）により明確に伝えるためのものではないかと考えられる。機能としては、①，②は話し手が伝えたいことを丁寧体で繰り返すことを通し、聞き手の気持ち（日本語能力の不足）を配慮する待遇標識の機能を果たしていると考えられる。

次に、③のデータ（発話例19）を挙げる。

発話例19は話し手（J19）が称賛の気持ちを示す時に、生じたアップシフトである（発話文番号1）。これは、J19が「ばっちり」を2回繰り返したのち、3回目の「ばっちり」に際して生じたアップシフトであるため、自分（J19）の強い称賛の気持ちを技能実習生に示したいのではないかと考えられる。機能としては、話し手が聞き手を褒めたりすることを通し、聞き手に親しみを示し、心的距離を縮める機能を果たしていると考えられる。

また、④については、次の発話例20を挙げる。

発話例20から、次のことが推測できる。話し手（J20）は「ここあるよ。」（発話文番号3）と聞き手（技能実習生C8）に説明した

＜発話例19・作業現場＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
［作業の音］			
1	＊	J19	お、ばっちりばっちり、ばっちりですね。
2	＊	C7	牛逼[28]、同じ日本語、日本語すごい、えい、英語、英語…意味わかりません。同じ日本語、すごい。
3	＊	J19	すごい↑。
4	＊	C7	すごい、すごい、…すごく、まだまだ…遠い。
5	＊	J19	俺ちょっと＃＃やったら＝。
6	＊	C7	え、違う違う違う…これ、これ同じ、これ意味とても違う。
7	＊	J19	病気みたいと思って＜笑う＞、病気なんだろう。

＜発話例20・作業現場＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	*	J20	危ないよ。
2	*	C8	あ、危ない。あ、下↑。これ＝
3	*	J20	ここあるよ。
4	*	J20	分からん↑。／沈黙2秒／
5	*	J20	こ、これ。
6	*	J20	まあ、いいです。
［作業の音］			

が聞き手からの反応がなかった。そのため、J20は「分からん↑。」と問いを重ね、2秒ぐらい沈黙し、C8の返事を待った。それでも、C8からの返事が来なかった。それから、J20は「こ、これ。」と説明し続けようとしたが、C8が分かりそうもないと判断し、「まあ、いいです。」と結局説明を断念した。日本語記述文法研究会（2009：279）では、「普通体を基調とする談話に現れる丁寧体は、話し手の意識が聞き手に向かっていることを示したり、ことさらに改まった表現に切り換えることにより、聞き手との心的距離を遠ざけたりする効果がある。」とされている。この指摘のように、発話例20からJ20が結局説明を諦めることを通し、C8に心的距離を遠ざけたいという心の動きが感じられるのではないかと思われる。

最後に、⑤のデータ（発話例21）を挙げる。

発話例21では、C9は技能実習移行（技能実習生1号から技能実習生2号への移行）の試験を準備し、J21はその準備を確認している。普通体で発話を進めているJ21は「これ、試験には困ります。」（発話文番号6）とC9にマイナスな内容を伝えている際、スピーチレベルを丁寧体にシフトした。この場合には前述したJ→B（C）3者間の⑬（表４）と同じく、話し手が技能実習生のやった作業に不満を持っていることがうかがえる。丁寧体を使うことにより、自分（話し手）の意見を婉曲的に伝えながら、聞き手のFTA（フェイス侵害行為　Face Threatening Act）を補償しようとしていると思われる。

＜発話例21・作業現場＞

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	*	J21	ははは＜笑う＞、C9さん、これ、分かる↑。
2	*	C9	ああ、分かる。
3	*	J21	これ、これ、全部OK。
4	*	J21	これも、こうする。
5	*	J21	これ、終わり。
6	*	J21	これ、試験には困ります。
7	*	C9	同じ？。
8	*	J21	同じ同じ。
9	*	C9	うんうん、OK、OK、分かりました。

４．３　一回性と連続性

4.1，4.2の分析から、図１のような傾向が明らかになった。

丁寧体基調場面と普通体基調場面のJ→Cに生じたシフトは一回性のものであるのに対し、J→B（C）に生じたのは連続性のものである。すなわち、丁寧体基調場面では、5つの状況において生じたダウンシフトいずれも、当該状況の発話文1文だけで、ダウンシフト直後の発話は直ちに基本スピーチレベル（丁寧体）に回帰し、普通体連続使用は1ヵ所も見られなかった。このことから、日本語母語話者にとっては、朝礼・会議・送別会のような改まり度が高い場面における発話は丁寧体からの逸脱は許容されるが、多用されてはいけないということが潜在的な意識においては共通していると考えられる。普通体基調場面では、J→Cにおけるアップシフトも一回性のものであり、5つの生起条件いずれも、丁寧体連続使用は1ヵ所も観察されなかった。これに対し、普通体基調場面のJ→B（C）においては、一度アップシフトすると、丁寧体が連続して使用される様子が観察された。具体的には、247（37.9%）（表３を参照のこと）の丁寧体発話文のうち、46箇所で丁寧体が連続使用されていた。これらの箇所の発話内容からみると、すべてが、作業のやり方や手順を説明する場面である。このことから、話者には、ゆっくりで丁寧に説明することを通し、相手によりよく理解させる気持ちがあるといえよう。さらに、「J→B（C）」では、表４からアップシフトされた機能として、待遇標識の機能が66.0％にのぼり、最も多かった。これは媒介者が会話に参加したためではないかと思われる。待遇標識の機能の次に多く使われたのは談話標識の機能（18.6%）である。それは、媒介者がいる場合は、日本人同僚が技能実習生に作業のやり方や手順を教える説明場面でもあったからである。

５．先行研究の結果との照合

以上で、鉄骨工場における技能実習生に向けられた日本人同僚の発話を「丁寧体基調場面」と「普通体基調場面」に分け、分析を行った。本項では、丁寧体基調場面で生じたダウンシフトと普通体基調場面で生じたアップシフトのそれぞれを、先行研究の結果と照らし合わせ、相違点を考察する。

丁寧体基調場面におけるダウンシフトの生起条件として、本稿では5つが明らかになった（4.1項）。先行研究の結果（2.項　表１「ダウンシフト」列）と照合すると、先行研究の⑪「中途終了型発話」、⑯「相手に同意・共感を求める時」と㉓「親しみ（冗談・称賛など）を示す時」は本研究においても観察された。それ以外は見られなかった。また、先行研究ではまだ言及されていないが、本研究では、「強い口ぶりで、念を押す時」、「職業規則を明示する時」にはダウンシフトを確認す

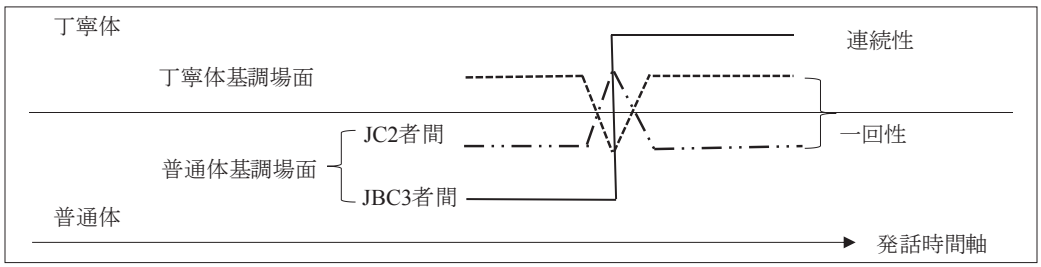

図１　スピーチレベルシフトの一回性と連続性

ることができた。

「普通体基調場面」におけるアップシフトの生起条件として、本稿では「J→B（C）」の16種と「J→C」の5つが見られた。これらの生起条件と先行研究の結果（2.項　表１「アップシフト」列）と照合すると、先行研究の③「重要部分を明示・強調（繰り返しなど）する時」、④「注釈・補足・独話などを挿入する時」、⑧「相手の普通体/丁寧体に合わせる時」と⑨「普通体の発話の後、丁寧体に戻る時」は本研究では観察されなかった。本稿表４における①③④⑤⑥⑧～⑭⑯は先行研究の結果と一致している。表４の③「実例を挙げる時」、⑦「相手に同意・共感を示す時」、⑯「1つの作業が終了時の合図」及び「J→C」2者間場面の④「説明を諦める時」は本研究で明らかになった新たなアップシフトの生起条件である。

６．まとめと今後の課題

以上、丁寧体基調場面と普通体基調場面それぞれにおけるスピーチレベルの使用割合、および、スピーチレベルシフトの生起条件と機能について分析を試みた。本稿で明らかになったことは次の通りである。

1）朝礼、会議、送別会は丁寧体を基調としているのに対して、作業現場のJ→CとJ→B（C）の発話場面は普通体を基調としている。
2）スピーチレベルシフトの生起条件として、丁寧体基調場面では5つ、普通体基調場面のJ→B（C）では16種、J→Cでは5つある。
3）先行研究ではまだ言及されていないが、本研究では、丁寧体基調場面におけるダウンシフトとして、「強い口ぶりで、念を押す時」、「職業規則を明示する時」、普通体基調場面におけるアップシフトとして、「実例を挙げる時」、「相手に同意・共感を示す時」、「1つの作業が終了時の合図」（J→B（C））、「説明を諦める時」（J→C）にもスピーチレベルシフトが観察された。
4）機能は、構造標識、談話標識、待遇標識と心的距離の伸縮の4つに分類できる。
5）丁寧体基調場面と普通体基調場面のJ→Cに生じたシフトは一回性のものであるのに対し、J→B（C）に生じたのは連続性のものである。

本稿によって、協力機関（鉄骨工場）では、丁寧体基調場面にせよ、普通体基調場面にせよ、同一のスピーチレベルが使われているわけでなく混用されうることが判明した。しかし、どのような時に、スピーチレベルをシフトしたら適切なのかということは技能実習生をはじめ、日本語学習者にとっては習得しにくい点だと思われる。そこで、まずは、スピーチレベルシフトの生起条件について学習項目として導入する前に、スピーチレベルと場面の組み合わせの指導から始めることを提案する。具体的には、実際の発話例、とくに、本稿で明らかになった新たな生起条件を表す発話例を講習現場で提示し、日本語学習者にその発話例が丁寧体基調場面か、普通体基調場面かを認識させる。それができたら、福島（2007：50）で論じられたように、それ（実際の発話例）を「『丁寧体』だけ、『普通体』だけの会話と比較しながら、『混合体』[29]のコミュニケーションの効果を学習者に考えさせ、意識化を促す」ことが有効であろう。そのうえで、スピーチレベルシフトを用いることを通し、心的距離を伸縮したり、談話標識

の機能を果たしたりすることができる点を提示することが、日本語学習者（技能実習生）による、スピーチレベルシフトへの理解を進めるために効果的だと思われる。

また、本稿は、鉄骨工場をフィールドとし、スピーチレベルシフトの生起条件と機能を明らかにしたが、今後、より多くのデータを積み重ね、本研究結果の信頼性を検討したい。とくに、スピーチレベルシフトには一回性のものと連続性のものがあり、場面によって現れ方が異なっていることを提出したが、この点については、より多くのデータを積み重ね、その結果を支えたい。さらに、一回性と連続性の原因、また、そのお互いに関連性があるかどうかを探ることも今後の課題としたい。

注

[1] 詳細は厚生労働省による「『外国人雇用状況』の届出状況まとめ【本文】令和4年10月末現在）」＜https://www.mhlw.go.jp/content/11655000/001044543.pdf＞を参照のこと。（最終参照2023-2-23）

[2] 技能実習生が来日後原則として2ヵ月間の講習を受けることについては＜https://www.moj.go.jp/isa/content/930005177.pdf＞を参照のこと。（最終参照2022-6-30）

[3] 詳細は上記注２のウェブサイトを参照のこと。

[4] 本稿では、宇佐美（1995）を参考し、生起条件はスピーチレベルシフトがどのような条件のもとで生じているのかを指し、機能はスピーチレベルシフトが談話上どのような機能を果たしているのかを指す。

[5] 宇佐美（1995）は、発話の素材・内容、前後のコンテクスト等の言語的要因や心的距離等の心理的要因という「ローカル要因」と、話者・対話者の年齢、社会的地位、性等の言語体系外の社会・文化的要因という「グローバル要因」の2側面からするべきだと論じている。そのうち「グローバル要因」を考察するためには、まず話者・対話者各人の素性を特定しなければならない。それは少人数ならば実現可能であるが、本稿で分析するデータは従業員が200人以上いる大規模な鉄骨工場で収集したものであるため、各人の素性を明らかにすることは困難である。よって、本稿では、スピーチレベルシフトを考察する際に、「ローカル要因」のみに注目する。

[6] 先行研究によって、スピーチレベルシフトの生起条件に関する説明は様々である。例えば、ダウンシフトの場合、三牧（1993）では「新しい話題への移行」、アップシフトの場合、足立（1995）では「話題の転換」、宇佐美（1995）では「新しい話題を導入する時」、嶋原（2014）では「ユニットを移行するとき」だとされている。しかし、ダウンシフトかアップシフトかに関わらず、いずれも談話の展開機能を果たしている場合だと判断できるため、本稿では、「ユニットを移行する時」に統一する。また、スピーチレベルシフトについて、表１にまとめられた生起条件以外に、日本語記述文法研究会（2009：276）では、「普通体を基調とする談話のなかでは、依頼、勧誘、確認など、聞き手に対して働きかける文が、丁寧体で現れる場合がある。」とされており、橋谷（2018）では、アップシフトの生起条件として「依頼」、「申し出・約束」、「報告」、「勧誘」などが挙げられている。日本語記述文法研究会（2009：276）は例の分析しかなく、データの出所を明示していないことで、橋谷（2018）は対面会話からのデータではないため、表１には掲載していない。

[7] 日本鉄骨評価センターは建設規模・使用鋼材の適用範囲に応じ、鉄骨工場をS、H、M、R、Jの5グレードに区分し、認定している。レベルはS＞H＞M＞R＞Jになっている。（詳細は＜http：//www.jsa-center.co.jp/kaisyagaiyou.htm＞を参照のこと。）（最終参照2022-6-30）

[8] 本稿の目的を達成するにあたって、録音は技能実習生に依頼した。それは、日本語母語話者に依頼した場合、日本人の同僚間の話が増えることが想定され、その中でどの部分が技能実習生にとって、実用的なのかを判断しにくい恐れがあったからである。

[9] 筆者の言語能力上の制限により、技能実習生の出身国上位3か国（ベトナム、中国、フィリピン）のうち、中国人技能実習生のみが実習する鉄骨工場に、協力を依頼した。

[10] 文字化のルールは原則的に、宇佐美（2019）の「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）2019 年改訂版」をベースとして、多少の変更を加えた。

。	文末（文の終わりにつける）
、	文の区切り
?	疑問
. .	0.5秒以下のポーズ
. . .	0.5秒のポーズ
/沈黙/	0.5秒以上を数値で示す
＜笑い＞	笑い
＃＃	聞き取り不能（モーラ数）
［↑］	上昇イントネーション
［↓］	下降イントネーション
［→］	自然下降イントネーション
［　］	文脈情報の補足
＝	音声の引き伸ばし

[11] 表2の普通体③について、動詞の現在形の否定形の場合、「ない」が「ん」に縮約されたものや方言「へん」にされたものも含めた。（例えば「ものによって、やり方を変えんといけん。」、「まあ、中国語でしゃべったら、この2人は分からへんよ。」など）

[12] 本稿では、「場面」は蒲谷（2003:1）を踏襲し、「『人間関係』と『場』の総称」と規定する。「基調場面」はある場面における話題のまとまりを指す。

[13] 丁寧体基調場面（朝礼・会議・送別会）においては、媒介者が常に参加しているにもかかわらず、その参加によって生じたスピーチレベルシフトはない。ということは、朝礼・会議・送別会の場合、媒介者が参加するかどうかには関わらず、スピーチレベルは丁寧体が基調となっている。これに対し、普通体基調場面（作業現場の会話・昼休み）においては、媒介者の参加はスピーチレベルシフトの割合に影響を与えているため、J→Cの2者間とJ→B（C）3者間の場合に分けた。

[14] 本研究の協力者たちに仕事開始から終了までの録音を依頼したため、昼休み（12:00～12:45）の間の録音データも少し得られた。しかし、中国人技能実習生間の中国語での会話を除いたら、日本語での会話は全て技能実習生と日本人同僚間の会話であり、しかも、基本的スピーチレベルは本稿の分析項目「J→C」（後述4.2.2項）と同じであった。そのため、昼休みの会話データを「J→C」項目の分析対象に入れた。

[15] 本稿では、Jは日本人同僚、Bは媒介者（通訳者）、Cは技能実習生を指す。「J→B（C）」は日本人同僚が、媒介者あるいは、技能実習生向けの3者間の発話場面を指す。「J→C」は日本人同僚が技能実習向けの2者間の発話場面を指す。

[16] 「1期生」は最初に協力機関（鉄骨工場）に来た技能実習生のことを指す。その次の年に来るのは「2期生」、また、次は「3期生」と呼ぶ。

[17] 詳細は庵功雄ほか（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』pp.504-505を参照のこと。

[18] 野田（2009：115）では、スピーチレベルシフトの運用には「形態レベル」、「社会言語レベル」、「文法レベル」の3つの要因が関係していると主張されている。そのうちの「文法レベル」は「デスマス形を使う節や文と非デスマス形を使う節や文を区別する」とされている。

[19] 本稿におけるスピーチレベルシフトの機能については、使われている用語「談話標識」は宇佐美（1995：36）、「待遇標識」「構造標識」は岡部（2001：28）を踏襲したものである。

[20] 3.3項の表３に示したように、「J→B（C）」では、普通体の発話文数が405（62.1%）文認められた。そのうち、独り言の場合が6文（1.5%）（例えば、「やりにくいなあ。あ、斜めに。」）補充表現の場合が17文（4.2%）（例えば、「あれは、気孔ですよ、溶けてないんから、もう気孔ですよ。」）、繰り返しの場合が5文（1.2%）あった（例えば、「あります、あります。」）。これらの場合を除き、残った発話文は計377（93.2%）文あった。

[21] 媒介者に通訳されたものが本稿筆者により日本語に訳された「（　　）」。本稿の他のところも同様である。

[22] 脚長は、溶接を行ったときの、溶接金属の長さを指す。

[23] 肉は、溶接時、高温、圧力のもとで、冶金的に接合する部分にできた溶融金属である。

[24] 本稿では、米川（2003：1）を踏襲し、俗語について次のように定義する。「『俗語』とは話しことばの中で公の場、改まった場などでは使えない（使いにくい）、語形・意味・用法・語源・使用者などの点が、荒い・汚い・強い・幼稚・リズミカル・卑猥・下品・俗っぽい・くだけた・侮った・おおげさ・軽い・ふざけた・誤ったなどと意識される語や言い回しを指す。多くの場合、改まった場で使う同意語またはそれに準じる表現を持っている。主な候補語に若者語・業界用語・隠語・卑語・流行語・差別語の大部分あるいは一部分がある。また一般の口頭語形がある。」

[25] 表４に示したように、27.7%－12.4%＝15.3%となる。

[26] メイナード（2001）は、会話のインタラクションを「相手意識型」、「相手アピール型」、「相手無視型」の3つ分けて、分析を行った。

[27] 「r」は切断機の不具合でできた切り欠きを指す。

[28] ここでの「牛逼」は中国語である。日本語で「すごい」と言う意味であるが、言い方は乱暴で親しい若者同士の間で使われている現象が多い。

[29] 福島（2007:41）では、混合体は「一つの『話段』において『デスマス形』の発話の中に『非デスマス形』の発話が一発話以上交じっているもの、あるいは『非デスマス形』の発話の中に『デスマス形』の発話が一発話以上交じっているもの。」とされている。（詳細は福島（2007）を参照のこと。）

参考文献

足立さゆり（1995）「日本語の会話におけるスピーチレベルシフト」『拓殖大学日本語紀要』第5号 pp.73-87

飯田朋子（2020）「技能実習生の交代によるコミュニティの再構築：受け入れ側の日本語母語話者とのコミュニケーションに注目して」『日本語コミュニケーション研究論集』第9巻 pp.15-25

飯田朋子（2021）「技能実習生と日本語母語話者の協働現場及び日本語コミュニケーションの実態分析：農業現場の実態に沿う技能実習生日本語教育のために」『日本語教育』180号 pp.33-48

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

生田少子・井出祥子（1983）「社会言語学における談話研究」『月刊言語』第12巻第12号 pp.77-84

宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用――スピーチレベルシフト生起の条件と機能――」『学苑』第662号 pp.27-42

宇佐美まゆみ（2019）「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）2019年改訂版」https://ninjal-usamilab.info/lab/wpcontent/uploads/2020/01/BTSJ2019.pdf

岡部悦子（2001）「口頭発表場面における敬語の機能：日本語母語話者と日本語学習者との比較から」『早稲田日本語研究』第9号 pp.25-36

蒲谷宏（2003）「『待遇コミュニケーション教育』の構想」『講座日本語教育』第39分冊 pp.1-28

岸本和博（2015）『外国人技能実習生受入れ実践ガイド――入管手続と協同組合作り』明石書店

熊取谷哲夫（1996）「メタメッセージと母語話者・非母語話者の談話行動」『日本研究・京都会議』01-02 pp.231-239

琴鐘愛（2005）「日本語方言における談話標識の出現傾向：東京方言，大阪方言，仙台方言の比較」『日本語の研究』第1巻第2号 pp.1-18

酒井智美（2015）「スピーチレベルシフトに関する研究――親しい先輩・後輩の会話をもとに――」『東京女子大学言語文化研究』第24号 pp.36-50

嶋原耕一（2014）「母語場面及び接触場面の同等初対面会話におけるアップシフトについて」『社会言語科学』第16巻第2号 pp.66-74

高宮優実（2017）「普通体を基調とした自然談話に現れる丁寧体について：――不満を表明する際のアップシフトに着目して――」『ことば』現代日本語研究会第38号 pp.63-82

谷口まや（2004）「日本語の講演の談話におけるスピーチレベルシフトの形態と機能」『早稲田大学日本語教育研究』第4号 pp.117-129

張学盼（2021）「技能実習生に向けられた日本語母語話者の文末表現の特徴――鉄骨工場のにおける作業現場のデータと講習用教材との比較から――」『東アジア研究科』第19号 pp.47-66

佟岩・浅野慎一（2001）「縫製業の中国人技能実習生・研修生における日本語習得と社会的諸関係に関する実証的研究（1）」『神戸大学発達科学部研究紀要』第8巻第2号 pp.183-210

日本語文法記述研究会（2009）『現代日本語文法7 第12部談話　第13部待遇表現』くろしお出版

野田尚史（2009）「日本語非母語話者の待遇コミュニケーション――デスマス形と非デスマス形の運用を中心に――」『待遇コミュニケーション研究』第6号 pp.113-126

橋谷萌賀（2018）「ポライトネスの観点から見る関西方言話者のLINEにおける言語行動――スピーチレベルシフトを中心に――」『日本学報』韓国日本学会第177号 pp.41-60

日高水穂・伊藤美樹子（2007）「スピーチレベルシフトの表現効果――シナリオ『12人の優しい日本人』を題材に――」『秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学』第62号 pp.1-12

福島恵美子（2007）「デスマス形と非デスマス形との『混合体』に関する考察――日本人ビジネス関係者の待遇コミュニケーションから――」『早稲田日本語教育学』第1巻 pp.39-51

福島恵美子（2008）「ビジネス関係者のスピーチレベルシフトの要因について――初対面二者の会話から――」『早稲田日本語研究』第17号 pp.59-70

馮荷菁（2020）「中国国内の日本語教科書『総合日本語』におけるスピーチレベルとスピーチレベル・シフトの考察」『日本語教育方法研究会誌』第26巻第2号 pp.70-71

三牧陽子（1993）「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要第Ⅰ部門』

第42巻第1号 pp.39-51
三牧陽子（2013）『ポライトネスの談話分析――初対面コミュニケーションの姿としくみ――』くろしお出版
メイナード，泉子・K（2001）「心の変化と話しことばのスタイルシフト」『言語』第30巻第7号 pp.38-45
山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版
米川明彦（2003）『日本俗語大辞典』東京堂出版
劉雅静（2013）「友人同士3者間会話におけるスピーチレベルシフトについて――上下関係のある親しい友人同士の会話データをもとに――」『言語学論叢』オンライン版6（通巻32号）pp.34-48